

# 研修参加報告書

令和 2 年 1 月 29 日

会 派 名 日本共産党江南市議員団

会派代表者 掛布 まち子

参加者 三輪 陽子

研修参加の結果について、次のとおり報告します。

①

年月日	令和 2 年 1 月 9 日 (木)
研修時間	13:00~14:30
研修場所	全国市町村国際文化研修所
研修内容	地域防災力を高めるために

②

年月日	令和 2 年 1 月 9 日 (木)、10 日 (金)
研修時間	14:45~17:30、10:25~13:35
研修場所	全国市町村国際文化研修所
研修内容	平時の防災と議員の役割 災害時・復旧・復興時の議員の役割

③

年月日	令和 2 年 1 月 10 日 (金)
研修時間	9:00~10:10
研修場所	全国市町村国際文化研修所
研修内容	被害弱者への対応 (熊本地震における経験より)

# 研修参加報告書

①

年月日	令和 2 年 1 月 9 日 ( 木 )
研修時間	13:00~14:30
研修場所	全国市町村国際文化研修所
研修内容	地域防災力を高めるために
<b>■目的</b> 近年の災害激化の実情をつかみ、地域の防災力を高めるための方策を学ぶ  (講師：中林 一樹)	
<b>■内容</b> 1、自然災害が続発する荒ぶる21世紀と要支援者が増大する地域社会の脆弱化 2、災害が複合化、広域化する21世紀の災害をイメージする 3、日本の高齢化社会と巨大災害時の支援体制の実態と今後の予測 4、2つの危機管理①リスク管理②クライシス管理の意義をつかみ、地域防災に生かす 5、事前情報の有無で異なる「予知災害」と「突発災害」 風水害など予知災害は早めの避難を！ 「空振りには命を救うが、見逃しは命を奪う。」 6、突発災害（地震）のリスク管理は事前防災で 7、事後のクライシス管理としての災害対応はBCP(事業継続計画)で 8、クライシス管理としての応急復旧は震災関連死を防ぐ住まいとライフラインの確保 9、将来のリスク管理としての災害復興 10、まとめー自然災害における危機管理と防災	
<b>■所感</b> ・南海トラフ地震など大規模災害への備えが言われているが、近年地域での大きい災害がないので、やはり他人事と考えてしまっていたが「防災達人たれ」と言われたことで、まず身の周りの防災の確認が必要であると確認できた。 ・予知災害の場合には「空振りには命を救うが、見逃しは命を奪う」とのことから、早めの避難を確実にする自治体の決断の重要性を学んだ。 ・突発災害のリスクを軽減するには、まず建物の耐震化などの事前防災を市として本気で行うことが必要であると考えた。	

# 研修参加報告書

②

年月日	令和2年1月9日(木)、10日(金)
研修時間	14:45~17:30、10:25~13:35
研修場所	全国市町村国際交流研究所
研修内容	平時の防災と議員の役割 災害時・復旧・復興時の議員の役割 講演と演習 (講師: 鍵屋 一、湯井 恵美子)
<b>■目的</b> 平時の防災と平時・災害発生時・復旧・復興時の議員の役割について学び、ワークショップ(ワールドカフェ)で考えをまとめる。	
<b>■内容</b> 高齢化社会が進む中災害時には家族、近所の支援体制が必要であるが、現実には近所付き合いも減り、地域の防災力がおちている。 また、消防団員や公務員の数も年々減り続けて公助も難しくなっている。 人は正常化の偏見を持ち、「自分は大丈夫」と都合の悪い情報を無視してしまう傾向がある。 そのため災害への備えを本気でせず、行政の災害対策の優先順位も低い。 防災4面体は自助→近助→共助→公助の順になる。 <b>平時</b> 議会の災害対応規定(災害時の責務や行動マニュアル)を確かなものにしておく。 <b>災害時の議会、議員の役割</b> ・地域での支援活動。情報収集し、窓口は議長に一元化する。災害対策本部の情報を住民に発信する。 <b>ワールドカフェ</b> ・岩手県大槌町の指揮を執った総務部長の災害対応、宮城県東松島市議会議員の行動のレポートから各自が読み取ったことを出し合い討論し、グループでまとめ、それをお互いに評価するというワークショップを行った。	
<b>■所感</b> 平時にいざという時に動けるためのマニュアル作りや訓練が必要である。 災害時には行政と力を合わせて行動するが、スタンドプレーで行政に支障をきたすことなく、議長を中心とした議員、議会の動きをすることが大切であることを学んだ。	

# 研修参加報告書

③

年月日	令和 2 年 1 月 10 日 ( 金 )
研修時間	9 : 00 ~ 10 : 10
研修場所	全国市町村国際文化研修所
研修内容	被害弱者への対応 (熊本地震における経験より) (講師:熊本市議会議員 村上 博)
<b>■目的</b> 熊本地震において車椅子の講師が実際に被災者となった体験を聞き、災害弱者への対応について対策を考える	
<b>■内容</b> 講演 (災害時の写真を見せながら) 1、福祉避難所が指定されていても市民に周知してなかったため、実際に大きな地震が起きた時福祉避難所に避難できなかったが熊本学園大学がインクルーシブ避難所に取り組んでいたため、車いすでも避難できた体験を聞く。 2、しかし、開設できる福祉避難所の数が少なく、障がい者の多くは避難所で生活ができず、危険でも自宅に戻った人が多かった。 3、バリアフリー仮設住宅が実際生活するにはバリアフリーになっていなかったため車いすで生活できる仮設住宅に建て直した。 4、議会本会議場も壁が壊れたり、照明器具が落下したりして、本会議再開までにかかりの時間がかかった。 質疑応答 (主な内容) 質問・なぜ障がい者は自宅避難になった人が多かったのか。 答え・特にトイレが普通の避難所では困るため。福祉避難所も壊れて半数ほどしか使えなかったため。 質問・仮設住宅はどんな場所に何戸作ったか。 答え・公園などに作った。仮設住宅後の復興住宅は360世帯 質問・仮設住宅ができるまでの時間は? 答え・一般住宅3か月、バリアフリー住宅6か月	
<b>■所感</b> 高齢者の避難のことなどは話題になるが、車いすなど障がい者の避難についてはきちんと考えたことがなかったので、江南市においても障がい者はじめ弱者の避難についてしっかり施設整備やマニュアル作りをすることが必要であり、それを市民にも知らせていく必要があると考えた。	